

イ 研究委嘱（平成11年度上尾市教育委員会）

（ア）研究主題

感性豊かな幼児を育てるための教育メディアの活用

（イ）研究の概要

a 主題の設定の理由

今、幼児の置かれている社会は、物であふれており、テレビのキャラクター商品をはじめ、テレビゲームやおもちゃなど、欲しいものはいつでも手にすることができる。そのため、心は満たされていると想像する一方で、子供達の心は渴いていると言われており、はじめは低年齢化している。人の気持ちを思いやる心が欠落し、生命の尊厳の念を喪失しているとともに、自己抑止力が欠如しているのではないかと思われる。

このような社会状況の中で、情緒や社会性の要素が確立する幼児期からの心の教育が重視されている。幼児期は、人間形成のために有効な体験をため込む時期であり、将来人間としての大木に育つためのたくましい「根」、すなわち、人として生き抜くためのたくましい体と、精神力を養うかけがえのない時期である。この大切な時期に、教師や友達と一緒に遊ぶ中で、ワクワク、ドキドキと心を躍らせる、驚く、感動する、未知の世界に出会い、不思議さを感じる、知識を広めるなどの体験を多くすることが幼児の心の成長を助長するのではないかと考えた。

さらに、人や動物に対する思いやり、優しさ、美しいものに感動する心、生きる意欲や喜びなど心の豊かさを大切にすることは、感性を育てることである。そのためには、幼児の内面の世界を豊かにする絵本や紙芝居、人形劇をはじめ、音楽鑑賞などの視聴覚教材や放送教育の活用が、幼児の心情を育てるとともに、自分の思いを素直に表現できる幼児の育成につながると考えた。そこで、本主題を設定し、教育メディアの活用を通してより多くの感動体験を重ね、教師の関わりや教育環境と幼児の心の育ちについて研究を進めることにした。

b 研究主題の捉え方

幼稚園では、人間として生きる力の基礎となる力をつけ、自己を形成し、豊かな感性や共に生きる喜びを感じながら、社会の変化に自ら対応できる、心豊かな人間の育成を図ることが大切であると言われてしている。そこで、友達や教師との生活を通して、人と関わることの楽しさや大切さを知り、主体性と社会的な態度を身に付けさせていくことが重要である。その中で、遊びや生活をより豊かにするために、放送教育や視聴覚教材を生かし、幼児の感性を培うことにした。

（a）感性について

感性とは、「外界からの刺激に応じて感覚、知覚を生じる感覚器官の感受性」「対象からの印象を受け取る力」「ものの本質やそのもののよさ、美しさなどを深く感じ取る能力」「美しさや快さ、神秘、人情、愛情など価値や意味を感じ取る心の感受性」などと国語辞典に書かれている。そこで本園では、難しく捉え過ぎず、「感じる心」「何かの刺激を受け、表出しようとする態度」と捉えることにした。

好奇心や探究心の旺盛な幼児期には、毎日の生活の中でいろいろなことに感動すると思われる。そこで、幼児の感動を見落とさないようにし、幼児の発言や行動を大切にしたい。そして、日常生活の中で放送や絵本、お話などの視聴覚教材を積極的に利用し、幼児の心を揺さぶる豊かな感情体験になるよう努めることが幼児の感性を育てることであると考えた。

(b) 教育メディアについて

社会の変化に伴い、幼児を取り巻く環境は、テレビやビデオ、パソコン、テープレコード、CDラジカセなどの機器をはじめ、絵本や童話、人形劇などの放送教育や視聴覚教材であふれており、幼児は其中で刺激を受けながら生活をしている。

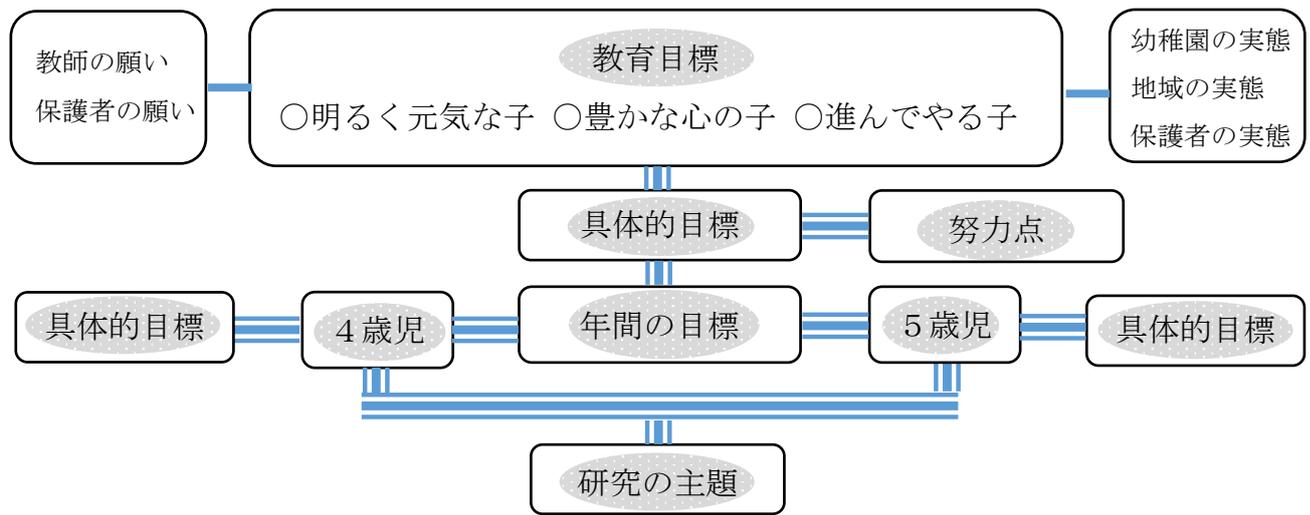
本園では、テレビやラジオ、ビデオ、ダイレクトプロジェクター、カセットデッキなどの機器や絵本、紙芝居、ペープサート、パネルシアターなどの視聴覚教材を使って、物語の読み聞かせをしたり、音楽を聞いたり、身体を動かして遊んだりしている。また、幼児の姿をビデオカメラで録画し、友達や保護者と一緒に見たりしている。そこで、幼児に豊かな感性が育まれるような、さらに効果的な教育メディアの活用方法を探り、工夫することが重要であると考えた。

(c) 放送教育や視聴覚教材の効果について

○幼児の内面の世界を豊かにする有効な体験をさせる。

- ・心を揺さぶる感動体験ができ、情操を豊かにする。
- ・幼児の感性を刺激し、多面的で豊かな感情を盛り上げ、表現意欲をかき立てる。
- ・未知の事象に興味をもったり、再確認し明確に把握したり、知識を豊かにしたりすることができる。
- ・実際に見てみたい、やってみたいという、幼児の興味や関心を高めることができる。
- ・幼稚園での視聴は、共感してくれる教師がいることで、一人では得られない充実感がある。
- ・紙芝居は、幼児の表情などによって、疑問や驚きを捉えることができる。また、ひとこまひとこま幼児の状態によって展開できるので、幼児同士の共通の話題や観るものと演じる者との交流ができる。
- ・お話は、幼児の感性を刺激し、夢を育てるとともに、物の見方、考え方、生き方を形成するための力を蓄えることができる。
- ・絵本や童話は、想像力を育てるとともに、語彙が豊富になり理解する力や話す力、聞く態度などの能力を養うことができる。
- ・友達と一緒に童話を聞くことによって、社会的な態度の芽生えが養われ、教師や友達との人間関係を深め、豊かな人間形成の基礎を培うことができる。

c 研究の全体構想



研究の観点

- 放送教育や視聴覚教材を効果的に活かした保育を進め、幼児の感性を豊かにする環境の工夫を考える。
- 幼児の心を揺さぶる環境の工夫を図り、幼児の思いを受け止め、一人一人の幼児が満足し、充実感が味わえる援助や助言をする。
- 教師が豊かに感じる心をもって、柔軟な対応ができるように努力する。
- 教師自身が視聴を楽しみ、一人一人の幼児の表情を見ながら、ほほえんだり、うなずいたりし、幼児の中に溶け込む。
- 幼児が何に心を動かしたか、何を表したいのか、幼児の心を読み取り、一人一人の幼児の発達に応じた援助や指導の工夫を図る。
- 幼児の欲求や行動と教師の願いの両面から、環境をどのように工夫したらよいか考える。
- 幼児一人一人の感動を引き出せる自然や放送教育、視聴覚教材からの刺激を受け、のびのびと生活できる環境を整える。
- 幼児が自己を発揮し、十分に遊びに取り組める時間と場、用具や素材を考える。

研究の内容

- 研究主題の共通理解を行う。
- 幼児の興味や関心は何か。幼児の遊ぶ姿を捉え、実態を把握し、幼児理解を図る。
- 身近な自然環境や放送教育、視聴覚教材に教師自身が興味をもち、探究する。
- 豊かな情操を育てる環境や教材、教具の工夫と、放送教育や視聴覚教材の利用を考え、幼児の感性を育てる。
- 保育実践を通して、環境の工夫や援助のあり方、幼児の表現や幼児同士の関わりと遊びの展開について考え、指導の工夫と改善を図る。
- 日々の生活の中で、一人一人の幼児がどう育ったか、個と集団の育ちを見極め、反省評価をし、保育の見直しをする。
- 幼児の遊びの姿と育ちを分析し、教育課程及び年間指導計画の修正をする。

d 具体的な取組

(a) 4歳児

事例1 テレビ視聴 “こどもにんぎょう劇場「きかんしゃやえもん①②」” 資料4

事例2 ビデオ視聴 “いきもの図鑑「あげはちょう」” 資料5

(b) 5歳児

事例3 ビデオ視聴 “しぜんとあそぼ「にわとり」” 資料6

事例4 紙芝居視聴 “ディズニー名作劇場「力持ちのポール」” 資料7

(ウ) まとめと今後の課題

a まとめ

- 幼児の感性を豊かにするには、日々の生活をどのように工夫したらよいか、放送教育や視聴覚教材などを幼児の生活の流れの中で、遊びに取り入れていくにはどうしたらよいか、幼児の実態を踏まえ、研究を進めてきた。その結果、幼児の行動をよりよく観察するようになり、心の動きを読み取ろうと心がけるようになった。
- 幼児が同じ時間に同じ空間を利用して遊んだり、同じ番組や絵本を見たり、同じ話を聞いたりすることで、先生や友達に自分の思いを伝えたいという気持ちが起こる。先生や友達に聞いて欲しいと思うのは、どの幼児も同じであり、そこから話合いが生まれる。その中で、自分と違うことを言っている友達がいることに気付き、それを認めないと会話が成り立たないことを知る。そこで、自分の意見ばかり主張せず、友達の言葉に耳を傾け、人の意見を聞こうとしたり、自分と考えの違う友達を認めようとする気持ちが起き、友達を理解するきっかけとなったりする。このようなことから、人と関わる力や自分をコントロールする力が育つと思われる。
- 美しいものを美しいと感じ、人の気持ちを察する心は、日常生活の中で自然や人や社会と直接関わる中で育つ場合と、例えば、「アゲハチョウが羽を広げてゆっくりと優雅に飛ぶ姿や、赤い実やきれいに紅葉した葉を見つけて喜ぶ様子」などの絵本を見たり、放送を視聴したりする中で、間接的に得る場合がある。事例からも分かるように、「NHKこどもにんぎょう劇場」や「しぜんとあそぼ」の番組、「お話でてこい」などの視聴を通して、幼児の発言が活発になったことがうかがえる。
- 映像を見ることによって、自然を見る目や動植物と関わる態度が変容した。例えば、ラジオの「お話でてこい」を聞き、幼児なりにイメージの世界を描いたり、怖い場面では、体をすくめたり、教師に寄り添ったりする様子などが見られた。このような幼児の姿から、テレビやビデオの視聴が、幼児にとって心の成長を促すために大切であり、必要不可欠であると痛感した。今後も、よい映像と音響で視聴させたい。
- 放送教育や視聴覚教材などの環境から、日常生活の中で雲や風などの事象に関する幼児の感性も育ってきている。例えば、うろこ雲を見て「先生見て!」「海みたいだね」と、空を指して教師に語りかけたり、ぽっかり3個連なっている雲を見た幼児が、「団子三兄弟みたい」と言ってみんなで笑ったり、「くじらに似ているよ」「ぞうに似ている」などと、雲を見て思い思いの発言をしたりしていた。教師の幼児に関わる姿が幼児の感性を育てる重要な要素であるため、教師は、それぞれの幼児の思いを受け止め、一人一人が満足するような対応することを心がけることが大切である。
- 研究を進める中で、教師が自然物や事象などの変化や美しいものに気付くことで、幼児もまた、気付いていくことができ、自然に感性が育っていく。教師は心にゆとりをもち、草花や生きものをかわいがり、誰にでも温かく接し、心の優しい教師であることが望ま

れる。一人一人の幼児に愛情をもって接し、いろいろな感動体験ができる環境の工夫を図ることが幼児の感性を豊かにし、友達との関わりや遊びを広げていくことが分かった。

○季節が秋に変わり、園庭の木々が少しずつ色づき始めた頃、保育室ではドングリやカラスウリなどを集め、壁面の木を夏の緑から紅葉に変えた。それを見た幼児は、「わぁ！秋みたい」と感動し、秋の歌を歌い始めた。すると、他の幼児も一緒に歌い、クラス全員で合唱が始まった。このように保育室の環境や園庭など、幼児を取り巻く環境が、幼児の心を育てていくことを痛感した。

b 課題

幼稚園や家庭でお話を聞かせていることから、幼児の語彙数が増え、静かにお話を聞こうとする態度も育ってきているが、中には絵本や物語を読んで聞かせない家庭もあり、自分で読める簡単な絵本を借りていく幼児もいる。そのような幼児は、家庭での刺激が少なく、無感動である。そこで、今後は保護者に対して、今まで以上に、幼児期の感動体験が大切であり、この時期に感性を豊かにする経験を多くもつように協力を呼びかける必要がある。そして、意欲的に遊べる幼児を育てるとともに、教師自身が保育を楽しんでいけるように心がけたい。

現在、高度情報化社会に伴いパソコン等のメディアが普及してきている。これからの子供たちは、多様な視聴覚機器を活用する力が必要になってくると考える。そこで、私たち教師も新しい情報技術を学び、情報を正しく読み取り、誤った情報に惑わされず、取捨選択し、生活に活かしながら、自分を表現する能力を幼児期から育てていけるようにすることが重要である。